

ろ、途中連日の雨で洪水となり不通で、やむなく一時久春内へ引返し水の引くのを待った。

こんなこともあった。波止場の鉄道引込線に日本人の緊急避難の衣類を満載した貨車がいっぱいあった。

貨車を必要とする「ソ連軍」は日本人を使役に駆り出し、これらの荷物を全部倉庫へ運ばせた。私どもは「ソ連軍」に取られるより日本人同志だからとこれ幸いに皆着た切り雀だったので、使役の最中「ソ連兵」の監視の目を盗み、素っ裸になり、下はパンツ、靴下からシャツ迄二重、三重に身に付け、更に「背広、オーバー」を着込み、まるで相撲取りのような恰好で出てくる。樺太とはいえ、八月中は未だ暑い汗を流しながら、此のような行為を数回、繰返したこともあった。冬に向かっでの備蓄をした。

ソ連の命令で全員元の仕事に復帰するよう命令が出たために又、徒歩の行軍が始まり帰宅して長い引揚げまでの生活が始まった。

## 私の十八歳の出来事

北海道 川崎 信道

昭和十四年八月、私は山形県沖郷小学校四年生の級友と別れて樺太栄浜に移住しました、というのも叔父が栄浜に住んでおり、叔父のすゝめで父が単身栄浜に先行し準備のできた頃、我々家族を呼び寄せたのです。

太平洋戦争も激しくなり、私が高等小学一年の時、父が召集されました。私も海軍志願をしましたが不採用となり、家の手伝いということになりました。青年壮年まで軍隊に入り町に残っている者は老人と女子供、其の中で若い年頭、いつどうなることかと不安の毎日でした。

ラジオ放送で終戦の詔勅を聞いた一週間も前八月九日に、国境からソ連軍が戦車を並べて攻めて来た、着の身着のまま手荷物程度で逃げて来る人、人、大混乱となりました。

栄浜には日本軍の兵舎があり、その跡にソ連軍が駐留するようになり一変してソ連兵の町となってしまいました。

私の家は農家で町のはずれに二十戸程集落を作り畠には通い作です、秋に漁業コンビナートへサケ、マスなどの運搬に引つ張られ冬は造材に徴用で春まで働かされました、農事組合に人数割当があり、高年齢の人は無理とのことで若い者の出番となります、十七歳の時に愛馬と共に小田寒へ丸太運搬、あの寒さの中、手袋もはかずに四月下旬まで働きました。

昭和二十二年十一月十七日、ソ連民政局から真縫の造材に行くよう命令が来て栄浜農業会から三人私が十八歳、前池盛夫十七歳、渡辺清英十六歳仕事は丸太切り(ヤマゴ)でした、鋸のとき方も知らず毎日のノルマ達成に頑張りました、家に帰りたくても帰れない、馴れない手付きで針仕事、石鹼のない洗濯、山へ行つては、たき火の側でシラミ取りなど、食べ物は黒パンや漬物、これと云った変わった物もなく、只腹一杯になれば満足、毎日が雪や寒さや丸太との戦いで楽し

と云えば寝ることだけ、体験した者にしか分からない労苦、其の中でも健康だけを考えながら身を守ったものでした、作業終了は四月二十五日の約束でしたが、家に帰してくれず、林業コンビナート所長(ソ連人)に話をしてもOKが出ず、むしろ此のま、流送作業をやつて行けの一点張り。

一応約束の日まで仕事をしたのだから逃げてでも帰ろうと三人で話し、まず食物を用意しようと思つた(大)三個づつ集め四月二十九日夜明け、十分間を置いて逃げることにし前池、次に渡辺、そして私と下山をし、薄明るくなる頃一緒になることで六キロぐらいの所で一緒になり、日焼けした顔、白い歯むき出しでは、えんだものでした。

山から真縫駅まで二十キロ、飯場の焚火の煙で黒くなったリュックを背負い、ボッコ靴に巻きゲートル、防寒外套に柄の長いトピロを持ち真縫駅に着き、汽車に乗ろうと駅員に聞くと、来るかも知らないし分からないとの返事、まだ午後二時、もう少し歩こうと線路の枕木を踏みながら白浦まで歩いたのです。

又白浦の駅に行き汽車が来ないのか聞きましたが、真縫駅と同じ返事、夕暮近く、歩き疲れ寒くて野営も出来ず心細くなりました。

鉄道官舎でまだ引き揚げてない方へお願いして一夜を泊めて頂き三人ゴロ寝、翌三十日早朝黒パン二個をお札に置き、再度白浦駅で汽車のことを聞きましたが昨日と同じ返事、已むなく又線路を歩きました。

渡辺は足にマメが出来、足をかばいながら小田寒駅までたどり着いたのです。丁度駅には貨物列車が二十数両止っており、山から歩き通しの疲れもあってこの貨車に乗って帰ろうと乗ったのです。

新栄浜駅で止ってくれ、ばと願いながら丁度その時落合林業コンビナートの係のソ連人も乗って行くと言ってきました。三十分程たち貨物列車は落合の方へ動き出しましたが、少ししてからソ連人は落合に着いたら鉄道警察につかまらないようにするとの話から信用の出来ないソ連人を信用したのが間違이었다と、走っている貨車を三両程移動しました。移動するのも危険です。

新栄浜で止ればの願いもむなしく通過してしまい、落合駅で警察に掴まれば大変と気が気でありませんでした。

ふと思出したのが内渕川の鉄橋、そして栄浜に通ずる国道道路のカーブの登りを勝負の場と決め、スピードがゆるやかになった所で飛び下りることを走っている貨車の上で話合いました。

線路のカーブを過ぎれば飛び下りるのは自殺行為なだけに鉄橋を過ぎてすぐ荷物を投げ、身軽になって貨車の足をかける低い所から進行方向に向かって二つの足を揃えないようにして、私が飛び下りたならすぐ続いて下りるよう一両一両に移り準備をし、大声で身を飛ばしたのです。

二人共、素直に実行しましたが、前池が足をすりむく程度で成功した、荷物を拾いホットしたが間もなく、鉄橋警備のソ連兵に掴まってしまったのです。

我々の言い訳は落合まで行くと遠いので、此の場所から栄浜に行けばの一点張りで約一時間程で其の場をさりぬけやつの思いで我家に着いたのです。

昭和二十三年五月三日に引揚命令が来て居たので、そこで、叔父が山に迎えに行つたとのこと、叔父も貨物機関車の石炭の所に隠れ夜通し山まで行き我々の帰つたことを聞き、又苦勞して帰つて来たとか、五月四日午後七時、箱型貨車に農家十数戸一緒に乗込んで榮浜を離れたのです、日本に帰るだけでよい、やはりすべてを捨てリュック一つの引揚げだったので。

## 敗戦、引揚、勲五等受章までの

### 労苦

北海道 大戸 誠一郎

昭和二十年八月、樺太富内岸沢学校の職員室で終戦を知り、職員、児童教室に集り、このことを皆に伝え、大声で泣きながらの抱き合いであった。

あの時のことがいつまでも心の底に残っていて四十有余年の歳月が流れている。

ソ連軍が富内岸に進駐するということで、先ず国旗

掲揚塔に白旗をか、げたところソ連兵が来て、言葉はよく理解できないが、白旗とは何だ。赤旗をか、げるのだと云う意味のことを荒々しく言うので、赤い布を探し、急いで白旗と取り替え、両手をあげるだけであつた。ソ連兵に剣付鉄砲をつきつけられては、どうしようもない。命だけは助けてほしいとの一念だつた。土足のまゝ、で入り込み、腕時計・万年筆など取られたがどうすることもできない。敗戦の惨めさをつくづく感じさせられた。

家族も何事が起つたのかと心配に心配、家に帰って事情を話してきかせて命だけは助かつたことを知らせ、家族のものもいつどのようなことが起るかも知れないから、覚悟をしておかねばならないことを知らせた。

このようなさわがしい事情が平静に落ち着いてから食糧がなくなり生活が苦しくなつたので、食糧を何とかしてほしいと幾度も幾度もお願いした結果、部落全員に黒パンの配給ができるようになり、学校がパンの配給所となつた。学校の仕事はもちろんであるが